

位置と環境

旧吉松駅の南17.5km、川内川右岸の標高208mの河岸段丘に立地している。水田との比高は約4mある。

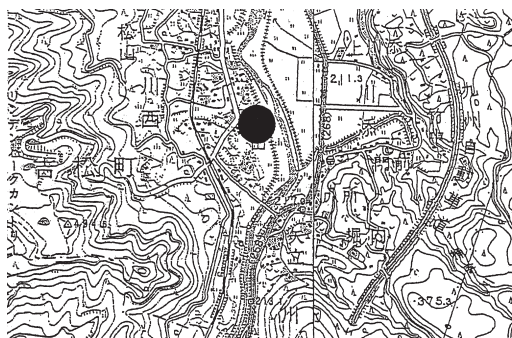
調査の経緯

昭和48年(1973)に鹿児島県考古学研究会と吉松町教育委員会によって13基が発掘調査された。

遺構と遺物

約100基の地下式板石積石室墓からなるが、調査された13基のうち、石室の形態は3号墳が方形であった以外は、すべて円形であった。人骨の残存状態は悪く、3基に骨片が認められただけである、副葬品は貧弱で、総計して剣3、鉄鏃29、鏡1、ガラス小玉4で、副葬品をもたぬものが2基あった。

1号墳の石室は内径1.4mの正円形を呈しており、11枚の安山岩板石を縦方向に配している。副葬品はないが、まわりにほぼ長方形に配された4本柱がある。



第1図 永山古墳群の位置

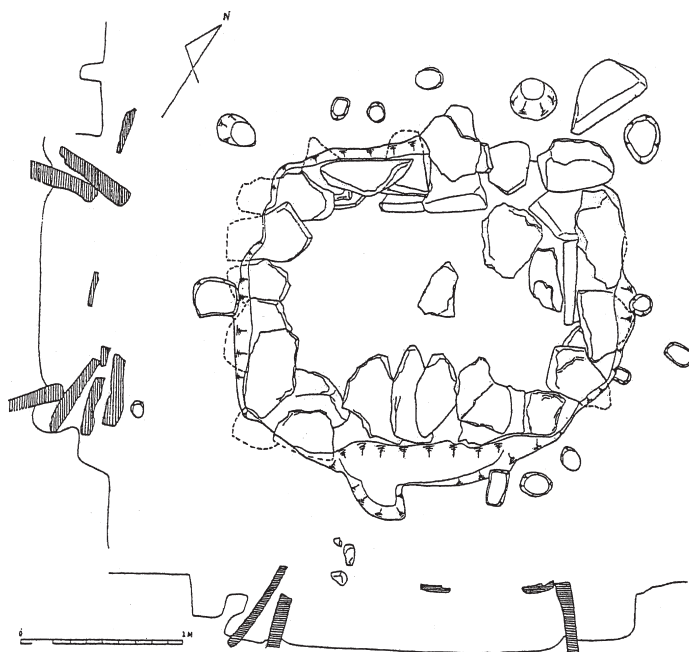
る。

3号墳は唯一の方形石室で長軸が1.7m、短軸が1.2mある。16枚の板石を用いているが、横位に使用したものと縦位に使用したものとがある。床面にシラスを敷いている。鏡1、剣1、圭頭鏃3の副葬品は東南隅に配置されていた。鏡は直径7.3cmのカマボコ形の縁を有する素文鏡で、鈕を欠失しており、外区に接して2孔を穿ち、鈕の代わりとしている。仿製鏡で、保存状況が悪いため、ほとんど粉状となっている。剣は全長24cm、身幅2.4cmで、茎に目釘孔が1ある。鏃はいずれも平根式圭頭鏃である。茎

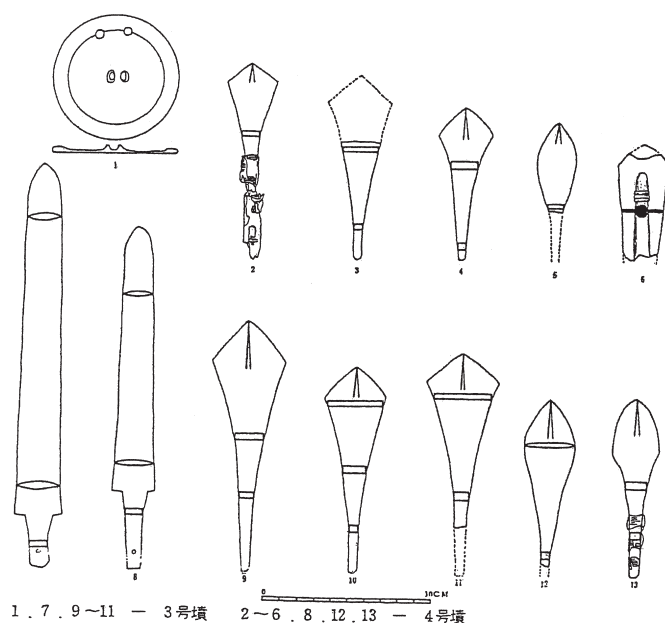
に木質部と桜皮の残欠がみられる。永山古墳群では古いタイプのものである。

4号墳も3号墳と同じく12枚の板石を横位に使用したものと、縦位に使用したものが半分ずつだが、石室の形態は内径1.35mの略円形である。副葬品には柄の木質部が残った全長20.5cm、身幅2cmの鉄剣1と、平根の圭頭式鉄鏃3、平根の柳葉式鉄鏃3、無茎の圭頭式鉄鏃1がある。これらの鉄鏃は3号墳に比べていずれも小型である。

9号墳の石室は1.5m×1.6mとほぼ正円形で、葦石と葦石の間には粘土質の土を用いている。副葬品は



第2図 3号墳



第3図 3号墳・4号墳の出土品

が、北側に大きな石を、南側に小さな石を置いている。葺石の外径は2.5m×2.4mのほぼ円形で、この調査では最大のものである。この周囲に内径7m、幅30～60cm、深さ15～40cmの逆台形をした円形周溝が巡らされている。周囲に円形の周溝を巡らし、溝の中に壺形土器9、器台1を供献しているが、この周溝は2基の石室によって切断され、ほかにも破壊されていることから当初はもう少し多かった可能性がある。こうした円形周溝は県内では特殊なもので、鹿児島県初見の周溝墓である。周溝から出土した土器は4世紀前半の一括資料で、成川式土器の編年に有効である。副葬品は長さ21cm、身幅2.6cmの鉄剣1・柳葉形鉄

鍬1で、ほかに鍬の茎部1がある。

永山遺跡は4世紀初頭から5世紀初頭にいたる時期である。

永山古墳群では春日式・並木式・阿高式・南福寺式など縄文時代中期の土器、出水式・市来式・西平式・御領式など縄文時代後期の土器や、弥生土器、打製石鍬・打製石斧・磨製石斧・石錘・磨石・石包丁などの石器も出土しており、縄文時代・弥生時代の遺跡でもあったことがうかがえる。

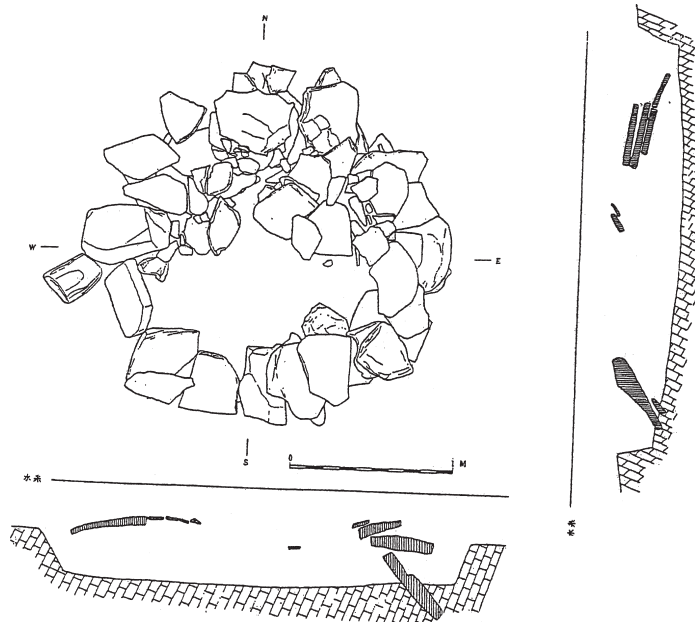
特徴

円形周溝、鏡・器台の出土など地下式板石積石室墓と中央の文化のつながりがうかがえる。

資料の所在

遺跡は史跡公園として保存されている。

出土遺物は、吉松町教育委員会に保管されている。



第4図 9号墳

北東部に集中している。鉄剣は下半を欠損しており残存長16cmある。鉄鍬は平根式圭頭鍬・柳葉形腸扶式（一段と二段各1）鍬である。

10号墳は内径が1.8m×1.9mの円形石室である。15個の板石と2個の丸石を横位と縦位に置いている

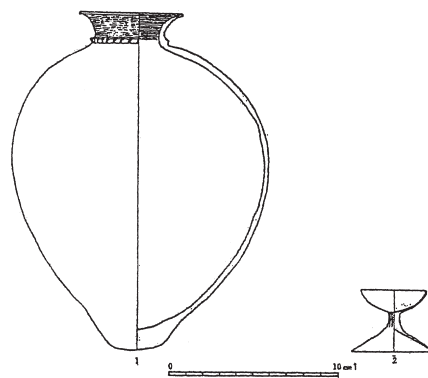
参考文献

河口貞徳他「永山遺跡」『鹿児島考古』第8号
1973 鹿児島県考古学会

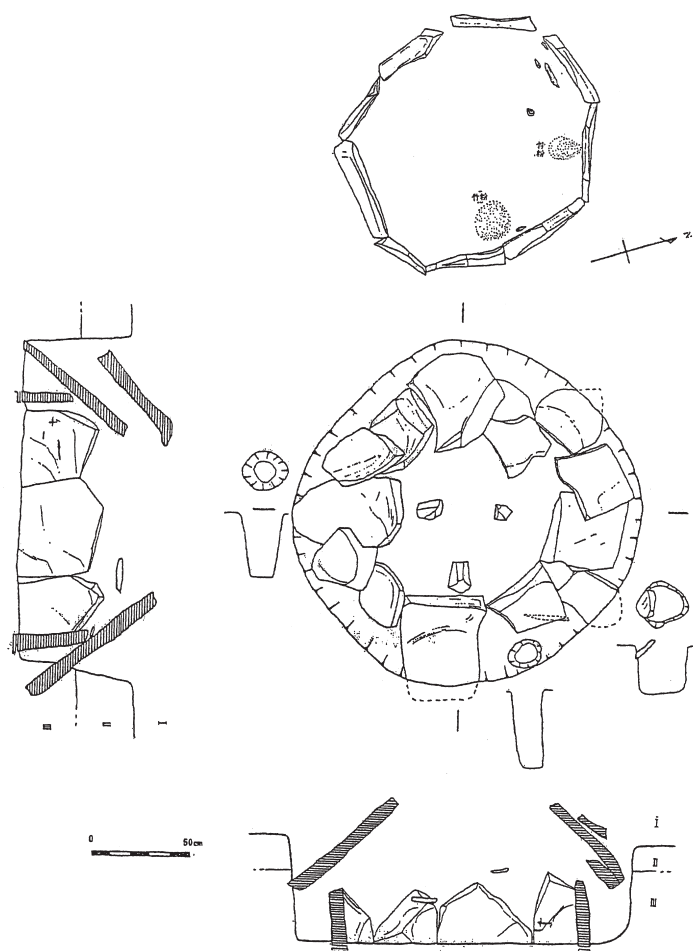
（河口貞徳）



写真1 10号墳



第5図 10号墳と出土の土器



第6図 14号墳